

慶応義塾大学 森基金 2015 年度

研究成果報告書

研究テーマ

「ドイツ・リューネンブルク大学のサマーキャンプ報告書

～就業困難な若者が就職できる効果的な訓練プログラム開発へ

の基礎研究の一環として～」

慶応義塾大学 大学院 政策・メディア研究科

後期博士課程

奥田美都子

(学籍番号 81449096)

はじめに

昨年(2015年)3月に、ドイツのデュアルシステム及び生産学校の視察のため、ミュンヘンとカッセルに行き報告書をまとめたが、そのなかでミュンヘンの商工会議所の Dr. Amann から紹介されたサマーキャンプに関心を持った。日本のニート・フリーターといった若者の問題を解決するためのヒントの一つとして、デュアルシステムや生産学校とともに紹介してもらった。義務教育の終わる14歳から15歳を対象とした夏休みに実施する3.5週間のサマーキャンプの取り組みと内容は以下の通りである。

1)そのサマーキャンプは、参加希望者を募集して、希望者は無料で参加できる。定員50名、一人当たり3,500ユーロは、ミュンヘン市が支出。義務教育の修了試験に合格できそうもない基礎学力の低い学生を対象に、バイエルンの森の中で3週間半、いろんな分野(心理学、スポーツ、音楽家、カウンセラー、セラピスト等)の専門家が指導する。リューネンブルク大学の Dr. Kurt Czerwenka 教授が考案したプログラムで実施して4年目、5か所で実施し、家庭環境が複雑な基礎学力が低く、やる気のない学生が、終了後には見違えるようにやる気を出して勉強に取り組み、義務教育修了試験に97%が合格し、実績を上げているそうだ。

2)読み、書き、そろばんを集中して教え、規則正しい生活をさせる。貧しい家庭や親が離婚して片親など家庭的に問題のある子供たちが、悪い環境から離れてじっくり勉強に取り組める環境を提供。今まで経験できなかった人間性を養う活動(演劇、音楽鑑賞、歌う、絵をかく、水泳、ハイキング等)をさせる。5~6人のグループを作り、ディスカッションさせる。最後に、キャンプの成果として演劇の発表会を行う。(読み、書き、そろばんの基礎力テストも実施)。

3)家庭では、バカ扱いされたり、虐待を受けたり、自尊心を傷つけられた子供たちに、「失敗は恐れるな。むしろ、失敗することはいいこと」と言うことからスタートし、ほめて認める。成功体験をさせることにより自信をもたせることが大切。

4)どんなことでも相談できる専門家を配置し、2人の子供に1人の先生が面倒を見る。先生の資質が重要で、マイスターを持ち、教えることもできる人間性豊かな人を選んでいる。

5)ある意味で徴兵制をカバーするプログラムであり、人間性向上教育、自立教育といえる。生産学校は、1年間だが、午前中のみであり、家に帰れば日常問題があるが、サマーキャンプは家の問題から離れて集中して指導を受けられるメリットあり。終了後も、1年間は担当の先生が1週間に1回グループごとに会ってその後の問題に対応し、やる気を維持させる。

その後、そのサマーキャンプの運営責任者 Ms. Maren Vobhage-Zehnder と会食する機会をもつことができ、さらに以下のことがわかった。

① 2009年にスタートして4年実施し、今年が5年目である。開発した教授の Dr. Carwenka が、70歳と高齢のため、Ms. Maren が代わりに資金集めをしているそうだ。現在6 Partner が理解を示して資金援助をしてくれているとのこと。具体的には、化学会社のBSF、ミュンヘン商工

会議所、インゴルシュタット商工会議所、ロータリークラブ、銀行のファンドが2つ。

- ② サマーキャンプは、3.5週間と時期が限られているため、現状では5か所で実施することが精一杯である。6か所で実施した年もあったが、オーバーワークとなって断念した。教師陣の確保が一番大変である。
- ③ 義務教育が終わる9年生での実施であり、貧しい家庭で、過去に親から虐待等を受けたり、けなされたり大人恐怖症、大人不信が根強い子供が多く、まずは、信頼できる大人もいることを理解させることからスタートする。よって、教師の人選はキーポイントであり、いろんな分野の一流の専門家が指導する。遊びの部分がないと、子供たちは心を開いてくれない。複雑な家庭から切り離して、自然の中の衣食住整った良い環境の中で過ごす経験が重要。
- ④ 問題は、その日のうちにお互いが納得できるまで話し合う。翌日に、しこりを残さないで参加できるようにするため、時には徹夜で話し合うこともある。
- ⑤ 成果が上がっており、関心を示している国もある。ルクセンブルクと打ち合わせ中とのこと。
- ⑥ 5年目となり、今後、どのように進めていくか検討中。そろそろ大学のプロジェクトから会社形態（NPOのような有限会社など）にするか考えている。教授は、現在プレス対応のみかかわっていて、運営はすべて、大学の職員である Ms. Maren がやっている。 予算を取り、いろんなところから資金を集めることが大変である。
- ⑦ このサマーキャンプが成功する要件は、以下の通り。
 - 1) 経済力があり、仕事がある都市、スポンサーがいる
 - 2) 大学があり、キャンプ終了後に1週間1回のペースで1年間面倒を見ることができる教員がいること
 - 3) 対象となる義務教育の卒業試験に合格できそうもない落ちこぼれの学生がいる
(ミュンヘンは50人定員だが、他の都市では30人定員)
- ⑧ このサマーキャンプ開発プロセスの本がドイツ語だけでなく、英文でもあるはずなので、確認してくださるとのことだったが、まだ連絡が取れてない状況である。



(真中が、Ms. Maren、右が通訳の永谷ベックマン啓子氏)

帰国後も Ms.Maren、通訳の永治氏と連絡を取り合い、上記⑧のサマーキャンプ開発の本を入手することができた。ドイツ語のみの出版で英語の翻訳もないとのことだった。そこで、永治氏ともう一人の翻訳者である本多氏の協力を得て、本の一部を翻訳することにした。

今年度は、予算の関係で一部しか翻訳できなかったが、その内容を以下に紹介する。「はじめに」、「エグゼクティブサマリー」、そして、「A章 コンセプトに関する考察」、「B章 実践の実現化」である（p5 目次参照）。

なお、この翻訳は、将来の研究および出版も計画していることを予めお知らせする。

2016年3月

後期博士課程

奥田美都子

ドイツ・サマーアカデミーコンセプト

目次

はじめに	3
エグゼクティブサマリー(要約)	5
A. コンセプトに関する考察	7
1章 基幹学校と将来性	7
1.1 将来への準備 (ユリア・グレチ)	7
1.2 青年期についての覚書	9
1.2.1 対立に対する耐性の弱さ	9
1.2.2 対立教育学 (暴力との対面)	11
1.2.3 まとめ: 社会で共存するための一般的な原則	13
1.3 基幹学校についての議論	15
1.3.1 基幹学校卒業生のチャンス	17
1.3.2 基幹学校の魅力	18
1.3.3 基幹学校へのサポート	19
2章 職業訓練に必要な能力	21
2.1 供給システムと帰属	21
2.2 今日、職業訓練を始める時点で何が求められているのか?	21
2.3 職業訓練に必要な能力についての問題	22
2.4 職業訓練開始資格の判定基準	25
2.5 職業訓練求職者の移動受入度	27
2.6 職業訓練応募者の能力の自己評価	28
2.7 雇用主の観点から見た応募者の能力	28
2.8 現在の職業訓練市場の状況	29
2.9 特別な支援措置の教育コンセプトのための結論	29
B. 実践の実現化	31
1章 予備考	31
2章 コンセプト	33
2.1 初日の例—モジュール: 誤りづくりプロジェクト	34
2.2 予定されている課題	35
2.3 クラッシュコース	37
2.4 成果のプレゼンテーション	39
2.5 参加者	41
C. 生徒と教授陣からのレポートと総括	43
1章 数学	43

1.1	カリキュラム	4 3
1.2	時間割ごとの実行実現	4 4
1.3	補習	4 5
1.4	動機の評価	4 6
1.5	数学計算の評価	4 7
1.6	生徒調査の評価	4 8
2 章	読む	5 0
2.1	理論	5 0
2.2	実践	5 2
2.3	結果	5 3
3 章	英語	5 5
4 章	プログラムのコンセプト	5 7
5 章	個性と自己紹介	5 9
5.1	自己紹介の練習と目標	6 0
5.2	実行するトレーニング	6 1
5.3	実証的結果	6 2
5.4	生徒による評価	6 3
5.5	指導者による評価	6 4
6 章	自己アップデートとコーチング	6 6
6.1	動機、興味と将来の方針	6 6
6.2	自己評価を変え、自己啓発する	6 7
6.2.2	経過	6 9
6.2.3	結果	7 1
6.3	コーチング、個人的な相談	7 1
6.4	結論	7 2
6.5	コーチングを通じた青少年の自己効力感の期待の強化	7 4
6.5.1	自己効力感の強化に関する個々の成果も例示的な図	7 4
6.5.2	評価	7 5
6.6	アンチ暴力ー訓練	7 6
6.7	生徒会議	7 9
6.8	青少年の責任意識の増進要請	8 0
6.9	催し物	8 2
6.10	結果と他の計画のまとめ	8 4
6.10.1	学生の仕事(基本として)	8 4
6.10.2	フォローアップ	8 6
7 章	生徒への調査結果	8 6
7.1	サマーアカデミー終了時の生徒評価	8 8
7.2	学校に戻ってからの終了後アンケート	9 3

8章 結論	97
8.1 組織と外的条件についての注釈	97
8.1.1 フレーム(外的)条件	97
8.1.2 構造	99
8.2 プロジェクト責任者の結論	101
9章 評価への意見(要約)	102
付録	104
文献	152

はじめに

大きな挑戦にはそれなりの努力が必要だ。われわれのロイファナ大学は、待ったなしに迫っている社会問題に真剣に取り組み、責任を果たすことを目標とした。そこには、社会と教育の場で不利な立場に置かれている人たちへのサポートも含まれる。このような理由から、「サマーキャンプ – 職業訓練への準備」が立案され、実施された。

学問的なコンセプトを作るだけでなく、実際に85名を対象に4週間弱にわたるキャンプを行うというプロジェクトには、それなりにお金がかかる。多額の費用を負担してくださった連邦雇用庁（ニュルンベルク）と同リューネブルク支部によるサポートにお礼を述べたい。費用面での支えとなっていただけでなく、最初からこのプロジェクトにコンセプト、実際に必要なモノ、概念的な面で協力していただき、それが大きく広がっていくのに貢献してくださった。費用の残り半分は（連邦雇用庁はどんなプロジェクトでも費用の50%までしか出資できないことになっている）、ジーマンス社が快く引き受けてくださった。この場をお借りして同社にもお礼を述べたい。

このようなプロジェクトには、純粋な費用面だけでなく、社会的、あるいは感情的な協力も不可欠である。その点で、予算がほぼゼロの状態ですマーキャンプのプランニングを引き受けてくれた私のゼミの学生達に感謝の言葉を述べたい。世話人、教師、学生の方々には、サマーキャンプの期間中、プロジェクト関係者の予想を大きく上回る負担がかかった。60名の若者と4週間寝食を共にすることが何を意味するのか誰も事前に想像できなかった。しかし、責任者のほとんどはこの挑戦に取り組み、全力でこの社会的な貢献に協力してくださった。感謝を申し上げたい。

このプロジェクトを本にまとめるにあたり、教師の方全員が、仕事とその結果について短いレポートを書いてくださったのは役に立った（ベルナー・リンデナウ、リンデナウ／アベレ、ガイルベルガー、ケーナン／オクス、ツィンペル、A. & C.マルカルト）。本質的な部分は、キャンプのグループ成果について記述している卒業論文（ダナ・ラングナー、エレナ・メクスナー、ドロテ・ミュラー・ブリュックナー、スヴェンヤ・トルツ、ゲルダ・ヴェーバー）が大きく寄与している。

これらを補完する形で、内容的に多くの示唆を受け、本書の最終編集でも協力いただいたユリア・グレチにも感謝を述べたい。

本書は、このプロジェクトに熱心に尽力くださったすべての方だけでなく、尻込みしながらでも参加してくれた若者達に捧げたい。彼らが私たちを動かしてくれなかったら、このプロジェクトの成功もなかったからだ。

2008年6月

クルト・チェルベンカ

エグゼクティブサマリー

この報告書は、2007年の夏リューネブルグとその近郊の58人の基幹学校の生徒をニーダーザクセン ハルツ 21人の世話人達が、4週間のサマー アカデミーで追行したコンセプトとその結果である。目的は、基幹学校の生徒たちが職業生活に進んでいける準備をすることであり、サマーアカデミーは基幹学校の生徒の職業能力を上達させるための包括的な課題コンセプトである。

第一章は、現実の基幹学校論議に関して幾つか論点を述べてみた。

基幹学校の生徒は、一船的に実務学校の生徒よりレベルが低いとみなされがちである。この評価は、生徒の自己評価像、あるいは若者の人生観に影響を与えてしまう。生徒達は、しばしば自分達の成績が良くない事で、それに続く職業の選択や労働市場でチャンスが無いことまたは少ないことを考えて、絶望し諦めてしまうのである。

そこで、基幹学校の生徒と、実習先を提供する企業との間で大きな意識の差が生じてしまう。しかしながら、このサマーアカデミーの向上訓練教育を通して、生徒達の能力や自己評価像を大幅に改良することができるのだ。

教育訓練に関しての能力というものが、まだ明らかに規定されていない事も、私たちは考慮に入れなくてはならないと考える。したがって、このテーマに関しては別の章を設けることにした。各自はどのような観点から、職業能力を観察考慮するかにより、出てくる答えや評価が異なってくる。

Bの章では、どのようなパイロットアカデミーで何が実際に実現されているか、そのコンセプトを紹介している。サマーアカデミーの内容には、3つのテーマの柱がある。**1. 基礎知識の向上、2. 自己評価の変化・向上、そして3. 自己表現力の向上。**これを4時限で構成して、テーマ毎に分けて行う。

まず最初に、参加者はお互いに自己紹介をして知り合いになる。サマーアカデミーのメインとなる活動は、生徒達は複数のプロジェクトに参加する。例えば、生徒議会、生徒会社または音楽演奏や劇、手工業の親方とのミーティングなどである。

プロジェクトの活動に平行して、参加者はクラッシュコースと個々のコーチングを受けることができる。クラッシュコースの内容は部分的には、プロジェクトの課題と結びつきがあり、特別な専門知識を仲介している。

サマーアカデミーを補強し、長期的に認識能力を強化し造詣できるようにコースが設けられている。終了時には、成果プレゼンテーションを行い、共同の終了式を行う。証明書は、参加者にやる気を起こさせる。

サマーアカデミーに参加しての効果は、科学的な調査がなされている。リューネブルグとその近郊にある基幹学校との協力作業を得て、移動、持続 (JIZOKU)、トランスファー効果の記録など、プロジェクトの持続可能な形成を確実なものとした。

Cの章では、アカデミーが提供するテーマ課題の内容を、教育者が紹介し評価している。ドイツ語と数学の範囲では、テストを通して生徒の進捗度を知ることができる。学習経過の報告では、

かなり短期間で、基幹学校の生徒は正しい教え方をすれば理解力は大幅に上がり楽しく喜びを持ち学ぶ事に発展できるとある。

自己紹介のテーマに関しては、コーチングと自己実現が参加している学生により学位論文として作成され、最初の成果はここで紹介されている。

Cの章の第7 セクションでは生徒達への質問の結果がまとめられている。

参加者は、組織と実践内容、生活面の世話、教育面の世話、他活動やプログラム提供などを評価する。異なるテーマに関して、個人的な成功例と経験されたメリットなども聞き出している。

サマーアカデミーの総合的評価は大変良く、生徒達自身の観点も大きな成功と見ていることがわかる。サマーアカデミーが終わってから、数週間が経ち、学校の授業が始まってから、生徒にどうでしたかと質問すると、プロジェクトの効果は大変良かったと肯定的に回答していることがわかった。

生徒達は、教科の授業の理解度が向上していて、自己信頼力が成長していると報告している。

セクション8では、プロジェクトの責任者の結論が続いて書かれている。

現在までの生徒達や教師やリーダー達からの、サマーアカデミーに関しての評価では、全般的に成功し、成果を出していると紹介されている。

現在は学校にて生徒達はフォローされている。生徒達はチューターにより継続して世話が続けられ、卒業後に職業学校や訓練する職場に応募して内定が決まるまで世話が続けられる。

A. コンセプトに関する事前考察

1. 基幹学校と将来性

1.1 将来への準備（ユリア・グレチ）

子供や青少年が現代社会で自立していくためにはどうしたらよいか。教育学は過去何年にもわたる経験からコンセプト、教育内容、手法などを導き出してきた。しかし今日、現代という時代とき、それは進行中の教育のプロセスのその先にある目的という次元の話になる。目の前にある現在は空洞化し、未来を生きるために何をすることが最重要課題となっているのだ。未来を乗り切るために若者たちは現在を棚上げし、成長を望んで努力し、待つ。その努力が実を結ぶまでじっと耐えて待つのだ。親も子供も将来のために投資をする。時にはすべての財産を費やすこともある。その結果、将来それが努力に見合う成果をもたらすことを期待しながら、今生きている現在ではなるべく節約に努める。

将来、求められるであろう人物像を想定し、それに自分を最適化することにだけ夢中になっていると、自分を単に融通の利く労働力に仕立て上げたり、企業家の目線による虚構の美德に自分を合わせようとしたり、過去数世代にわたって最適として通用してきたプロフィールを作り上げようとしたりする。

クノブロッホ（2001年）が、まず社会や制度を変えられないかと考えることなく、個人を過度に捻じ曲げる世の中になっているのではないかと疑問を唱えたのももっともである。自ら体制を変えようとした68年世代のような変化に対する楽観主義は現代の若者にはほとんど見られない。現代の若者はとにかく目の前のことに対応するだけで精一杯だ。それもできるだけ迅速に。ゆっくり考えたり、議論したりしている時間はないからだ。

ヘルマン・リュッベ（1997年）は「現在の縮小」という言葉を使ったが、それは「一般的に通用する」知識や慣れ親しんだ生活状況の耐久期間が短くなっていることを表現しようとしたものだ。教育学としてもこのような変化に対応している。つまり、指導の中心が知識の伝達ではなく、キークオリフィケーション（鍵となる資質）の醸成に置かれるようになってきている。この資質は、オールラウンドで様々な状況に対応できる引き出しをいくつも持ち、個々の問題や状況に対処できるような性格を持つものである。というのも、誰も将来何が重要になるか言い当てることはできない中で、生徒たちはその不透明性と折り合いをつけてやっていくことを学ばなければならないからだ。他者の助けなしでも将来の人生を乗り切っていけるように、学ぶことを学ぶ、つまり、助けの手を差し伸べてくれる親や教師がいなくなる寸前に、自立が必要な人生に投げ込まれ、それを乗り越えていくことを学ぶのだ。

このような若い世代はしばしば「将来のない」世代とも呼ばれる。そして「チャンスはない。だからこそ、それを利用するのだ！」（クノブロッホ 2001年）というキャッチフレーズがつけられたりする。この世代には将来がないのか？それとも将来がどんな姿をしているのか誰にも予測不可能なのか。だから、将来はつかみどころがないものとして排除されるのか？

デルファイ法、さまざまな将来のシナリオ、未来研究による予測など、将来を予測する方法は多々あるが、この謎解きは決してはっきりとした答えにたどり着かない。しかし、答えはそもそも必要なのだろうか？大人の負う次世代に対する責任は、4世代先の子孫までもが今と同じような生活ができることを保証することを意味するのか？ひとつだけ言えることは、将来の世代に自分たちの道を自ら選べる余地を残しておくことだ。決して、取り返しのつかないような形であらかじめわれわれの世代が道を踏み固めてしまっただけではいけない。

「将来に対応できる能力」を身に付けるという課題に直面し、教育機関は「学校をネットにつなごう」とかBLKのプログラムである「トランスファー21」のような手段で対応しようとしているが、結局、十分に将来を見据えたものでないという批判を受けている。しかしこれらは、まさに学校が生徒たちにしてあげられることそのものではないだろうか。つまり、利益をもたらしながら現代社会にその一員として関わり、人生が変化に満ちた道中であってもそれについていけるような能力を身に付けることが求められているのではないか。

完全な姿として見えはしないものの、この世代にも将来はある。したがって、教育の役割は、現在を見失うことなく、迅速に変化する世界でもやっていけるように子供たちを育てることにある。生徒たちには、喜び、共同性、満足感が経験でき、努力がそれほど時間を置かなくても認められるような現在という時間を用意してあげなければならない。

子供や若者に恐怖のシナリオに満ちた将来を想像させても、それは本人そして社会全体の将来を共に積極的に作り上げていく能力を奪うことになってしまう。この「作り上げていく能力」というのは非常に重要で、いかなる年齢層、学歴を持つ人間にも意味を持つ。というのも、どんな人間にも目の前には将来があるからだ。

1.2 青年期についての覚書

青年期の自然な特徴は、生理学、ホルモン、解剖学的な面での肉体的変化、さらにそれに伴う心理的な条件下に見られる。もっとも重要なのは性的な成熟が始まることであり、それは10～14歳の時期に起こる。心理社会的には、この時期に親元から離れる自立が始まり、自己発達のプロセス

を自分自身で行っていくようになる。フルレルマン（2005年、26ff）はこの時期に乗り越えるべき発達課題として以下の4点を示している。

1. 学業と職業における知的・社会的克服
2. 内面における性的属性の確立と、同性と異性に対する関係
3. 自分のライフスタイルの形成
4. 価値や規範に応じた役割の受容

これらの課題をこなす際に若者がまずサポートを求めるのは同年代の若者である。同世代の友達は、構造的に人生の同じ段階にあり、親とは違った形で現代の人生を歩んでいる（比較 フェンド 2001年）。つまり、同じ場所に属していて、受け入れられているという気持ちになれる。多くの若者は思春期に形式的な外科手術においてこの思考に達する（エーデルシュタイン／オサー／シュスター 2001年）。青年期は今日、自立の多時性によって特徴づけられる。多くの若者にはさまざまな点で早い時期から高い自立性が見られる一方で（例えば、職業の決定、ライフスタイル、服装、セクシュアリティ）、教育や職業訓練の過程がより長期化する中で、年齢では成人に達していても経済的には親に依存していることが多い。その際、教育のチャンスや経済的な発展の可能性は、若者がどんなミリューに属しているかという要素に大きく左右される。社会経済的ミリューが低ければ低いほど、教育の機会も少ない。

若者の置かれた社会的な環境において、成果主義や規範志向が高く評価されればされるほど、より早い段階からそれを達成するための努力が行われる。基幹学校に通う若者がたいてい既に幾度となく自分の能力が人より劣っているという経験をしており、それによって自分が達成しようと期待する目標レベルを低く設定してしまうのはこのためだ。

自分自身の主観的な見通しと、他者からの期待が完全に一致しない場合、それに加えて経済的に自立することができないがために青年期が長引いている場合、同年代の若者を手本とする期間も延びる（ミュンヒマイヤー／フルビア 2001年）。それにより、非常に変化の激しい社会における方向性の模索という問題は少なくなる。期待に応えられないと思えば思うほど、そして教育のミリューや社会的環境が別の価値や規範を子供の時期に植えつけなければつけないほど、若者グループの規範と価値はつまり、より一層大人のそれとは異なることになる。子供たちは、社会的、言語的、認知的、感情的に自分の属するサブカルチャーで順応していくように準備がされている（フルレルマン 2006年）。このサブカルチャーはさまざまな領域で、成果に対する期待、仕事の仕組み、社会的行動様式などを要因として現時点での生活環境とかい離していることがある。そのため、若者が自身の中に持つ目標、規範、感情と、公的な機関や仕事の世界でのそれらに対立した場合、それを簡単に若者の「内面の」あるいは「外的な」現実によって説明することはできず、若者が自分の生活環境やグループの規範においてどれだけ社会化しているかという尺度が用いられなければならないのだ。

1.2.1 対立に対する耐性の弱さ

規範、目標、意思、行動が対峙し合い、矛盾を抱え、すぐにはすべてを満足させるように結びつけることができない場合に対立は起こる。そうでなければ単なる問題として済む。この定義からも明らかのように、対立というのは複数の人間が共存する民主主義の社会で起こるものである。つまり、対立は他者との日常生活で起こるものであるが、その深刻度には程度差がある。問題となるのは、比較的根が深かったり、やっかいだったりして、簡単な解決策がないがために暴力という手段が使われる対立の構図である。

青少年による暴力行為がますます理解しがたく、残忍化し、特別な注目を浴びたことはこれまでにままたり、一部の政治家がもっとも厳しい刑に処するべきだと主張するケースもあった。これについてはケルステン（2002年）が、上で述べたグループの規範、価値観の齟齬、早期の社会化の観点を用いて説明している。それによれば、性的特有性による暴力行為に対する躊躇のなさ、文化的・社会的発達の背景、あるいは状況的要因による方向性の欠如が現れる。特に若い男性については、ケルステンは、90年代にフィラデルフィアのスラムで実施されたエリヤ・アンダーソンのスタディを用いて報告している。それによると、路上での生活が若者の周りに、「健全な人間の常識」では理解しがたい独自の規則を生まれさせているという。若者たちは、深く根差した不安定な感情と他者からの助けを期待できないというあきらめから公的機関に対して強い不信感を持ち、そこから「路上の規則」が生まれるようになった。この規則では、グループ内での地位の上昇と下落がはっきりと定義されている。罰も受けないが、批判されたまま、つまりされるがままでいるだけだとグループ内での地位は下落する。自分の都合や意見を暴力によって押し通した者は地位が上がる。自分の都合や行動が他の人に受け入れられることは「尊敬すべきこと」と見なされる。他者から敬意が払われなくなると、社会的なステータスも下がる。このような社会的な信念は、対立が精神的あるいは肉体的な暴力で解決される場合、既に家庭環境の中で身に付けられてしまっていることが多い。

若者にとってその他のステータスシンボルには物質的なもの、例えば、洋服などがある。暴力行為が起こる要因の分析は、シュレーダーとメルクレが以下のように行っている（2007年 21ff）。

- ・家庭内暴力や虐待、トラウマ化した経験、同年代の若者との間での暴力の経験など
- ・貧困、失業のような構造的社会的要因、同時に、暴力に走りやすい若者グループや仲間、メディアや公共の場における暴力の露出

暴力に関するさらに詳しい分析は他の箇所にもある（76頁など）

若者の暴力行為に関する研究から分かることは、暴力が具体的な目的を伴ったり（物質的な何か、あるいは社会的な利益を得るため）、内在的なものであったり（幸福感を得たいため）、外に吐き出されるものであったり（内面の状態を映し出す鏡としてのやり場のない怒りをぶつける）するということだ。（シュレーダー／メルクレ 2007年 24ff頁）

1.2.2 対立教育学（暴力との対峙）

- ・対立に対しての教育学（例：ヴァイドナー／キルプ 2004年）

「信頼、共感、敬意に満ちた関係を基礎に、犯罪的な行為の結果を批判の集中砲火に浴びせるのである」（ヴァイドナー／キルプ 2004年 63ページ）。ここで取られる措置は、犯罪や欠陥の場合に特化したものであり、向社会的行動を促し、道徳的な意識を起こさせ、自立的に行動する能力を強化するものである。その際、対立を乗り越える戦略をさまざまな角度から分析することが不可欠である。個々のプログラムでは、何度となく繰り返され身に付いてしまったアグレッシブな行動様式を永続的に変化させるために、一定の動作を覚えさせることもある。例えば、まずはシグナルとしての親切な行為、次に真剣にはっきりと態度を示すための行為を行い、さらに口頭によるシグナルを発し、最後に静止状態に戻る（タイムアウト）という一連の動作である。（比較 シュレーダー／メルクレ 2007年；ミュラー・ブルックナー 2008年）研究結果によれば、この方法によりアグレッシブさやカッとなる傾向が減少し、攻撃的な対立が減ったことが示されている。

- ・体を使った行動

ケステルケとシュテッケレ（1989年）は、運動を中心としたプログラムでは以下の点を留意する必要があると述べている。プログラムの内容は、若者の欲求に沿ったものであること、フレキシブルで生活の他の場でも応用できること、恥ずかしい状況に陥るようなパターンをできるだけ避けること、怖がらずに参加しやすい雰囲気を作り出すこと、そして性別に応じた内容にすることである（ケステルケ／シュテッケレ 1989年 81頁）。その結果、ストレスや負荷をより良く解消できるようになり、社会的能力が高まり、社会への適応力が向上し、個人のアイデンティティが強化され、暴力を容認する態度と暴力行為が最小限に減ったという成果がもたらされた（ケステルケ／シュテッケレ 1989年 81ff頁）。格闘技を使った方法でも同じような効果が表れた。（より詳しいヒントはサマーキャンプのプログラムの中にあり）。若者はアグレッシブさをポジティブなエネルギーとして吐き出さなければならない。より良い身体感覚を得て、自信と自己認識を感じとり、暴力に頼らない別の方法を知ることが必要である。

- ・経験教育学的方向性

暴力との対峙については経験教育学による多くの文献がある。ここでは、サマーキャンプのコンセプトと関連があり、そこでのアプローチの根拠を補完する観点を取り上げて紹介したい。まず前提として、体験が長期間にわたって積み重なり、記憶に焼き付けられる状況、事象、出会いがまとまった一つの総合的な姿となることが重要だ。シュレーダーとメルクレによると（2007年、97ff頁）、以下の3点の特徴が意味を持つ。

- ・自然、グループ、自分との体験

- ・実体験とグループプロセスからの学び

- ・シチュエーションとの関連

これにより、自己イニシアティブ、自己責任、チーム作業、コミュニケーション能力、他者を助けよ

うとする態度などが育成される。グループ行動を行うことにより、対立のある状況やその解決策について話し合われる機会が生まれ、いくつかを実際に試してみることができるようになる。我々のコンセプトでは、生徒たちによって議会が作られた。選ばれた代表者は生じた問題、新しい目標、意図について議論し、決定を下す。チームのスタッフの中から特定の専門分野に詳しい者が議論の場に呼ばれたこともある。

1.2.3 まとめ：社会で共存するための一般的な原則

・関係の構築

サマーキャンプに関わるものは、参加者であってもスタッフであっても、学生でも生徒でも、まずはあるがままの一人の人間として受け入れられる。コメント、批判、制裁などはその人の人格に対してではなく、行動に対してのみ発せられる。

・規則を学ぶ

多く人が一緒に暮らす場では、共同生活を円滑に行い、不要な負の感情を最小限にするための規則やきまりが必要である。規則は、何かあるたびに根本の問題に立ち返って議論しなければならない状況を避けるため、あらかじめ明確に定義され、客観的に定めることが重要である。規則を守るようにすれば、状況がエスカレートするのを防ぐことができ、問題も処理できる。規則の例外は別に扱われ、議論し、複数の責任者によって判断が下される。

・成功体験の実現

どのような課題も、達成可能な範疇で、若者にとってはある程度の挑戦とならなければならない。成功は努力の上に勝ち取ったからこそ価値が出るからである。

成功はしかし呪物ではない。失敗からも何かしら学ぶべきものがあり、意義を持つことがある（比較「失敗デー」）。最初にいくつかの失敗をした後に得られた成果は、特に人格形成に有効である。

・チーム作業

プログラムではリーダーも若者も関係なく全員が、他の人と一緒に課題に取り組むグループ作業を行う。作業の内容によってグループは変わり、作業の効率性を理解したり、異なるメンバーからなるグループ内の社会性を経験したりできる。ミーティングの際にはそれぞれが本来属するグループに戻る。

・コミュニケーション能力の育成

暴力は常に「言語の欠如」を意味する。望み、感情、問題、対立について話し合う際には、テーマを客観化し、感情を挟まない態度がとられる。そのため、事態や問題が深刻であればあるほど、信頼のおける相談相手が必要となる。グループディスカッションなどの場で理解が難しい内容は、非常に緊密な

関係の人がそれをかみ砕いて説明するとうまくいくことが多い。それにより、難しい内面的な対立を表現する言語手段ができ、他者と意見を交わす可能性が開かれる。プライバシーに関することでも難しいことでも、基本的にはどんなことでも話せる状況でなければならない。重要なのは信頼のおける人がいることである。

・対立の克服

対立を克服するには、まずは対立の内容に丁寧に向き合い、それを言語化することが必要だ。その上で、議論をし、再現しながら、ロールプレイなどの方法で対立に対処する。様々な立場を受け入れることにより、対立の相手に対する理解度が高まる。さらに、解決法を出し、その実現性を検証する。その解決方法が有効であるかどうかはその場で現れる。もっとも効果的なのは、その解決方法を後で検証するような計画を立てることだ。

重要なのは、どんな解決方法であっても現実に即していることである。理想的な解決法はしばしば実現できない。結果、当事者それぞれがぎりぎりまで譲歩した妥協点を探ることになる。

1.3 基幹学校についての議論

今日の基幹学校についての議論は、一般的見方や政治色にもよるが、2つの立場があると言える。一つ目の議論は、PISA テストの結果分析に基づいたオーバーラップ効果を念頭においたものである。

基幹学校の生徒でも、実科学校あるいはギムナジウムのレベルに相当するような学力を示す例があるという主張だ。つまり、基幹学校の生徒の能力は低く評価されているという意見だ。もしある生徒が実科学校やギムナジウムと同じレベルの能力を持つ場合、能力の発達が適切に促される環境に置かれれば、低く評価された基幹学校にいるより高い能力を発揮するというものだ。

他方、二つ目の議論では、レッテル貼りの仮説が主張される。基幹学校は、誰も行きたがらないみそっかすの学校だと中傷する声である。基幹学校は親も最悪の場合にしか子供を行かせたがらず、低い評価の中で麻痺している。下がる一方のレベルを食い止めるため、基幹学校はなくすべきだ。

両者の主張にはそれぞれ真実が含まれている。基幹学校にも成績が良く、向上心ややる気のある生徒がおり、主にバイエルン州で見られることだが、優れた教育を行っている基幹学校もある。同時に、生徒と教師の互いの期待が交錯する中でこれ以上の努力は無理だという基幹学校も多く見てきた。教師は、限られた可能性の中で精いっぱい教育的な影響を与えようと努力するが、卒業生を無事就業させることはほとんどできない。生徒たちは成績が悪く、就職ができない。現実的な事実と主観的な言い訳が困難な形で結託してしまっているのだ。

政治は基幹学校を立て直す約束をしながら、それを守らなかった。中等教育第1段階にある3種の学校の一つとして、基幹学校は他の2種の学校と競争関係に置かれている。基幹学校の教育内容と課程は他の学校のそれとは異ならなければならない。基幹学校を修了した者は、デュアルシステムによる職業

訓練を行うか、全日制の職業学校に通うことになる（コウリ 2008年 1頁）。しかし、基幹学校に特別な独自の顔を持たせる努力はされてこなかった（コツドン 2007年 446頁）。人材面でも、特に教師が互いの情報を交換できる場を作るような工夫はされてこなかった。この現実を踏まえると、基幹学校の向上のための予算措置について、政治側の主観的な印象はずれている。なぜなら、他の2種類の学校と比べて、基幹学校の質の向上を訴える主張が格段に多いからである。

結果として、ほとんどの親が「重要性ではどの学校も同じ」という約束を信じてことができなくなっている。ましてや、実科学校やギムナジウムに比べ、基幹学校につき込まれる公的資金は少ないのだ。職業の場においてグローバル化や合理化が進むだけでなく、技術の進化や情報技術の広がりが初めて社会人となる若者により高いハードルを突きつける。多くの雇用主は、基幹学校の卒業生は仕事に必要とされるレベルに達していないと判断している。その結果、職業訓練の応募者に対する条件はますます高くなっているのに、実際のところ、応募者の実際の能力というよりは学歴や修了成績が重視されるという現象が起きている。というのは、「ドイツでは雇用主は学校側が行った選抜を信頼し、教育制度から与えられた卒業証書によって応募者の能力を図る」からだ。（アルメンディガー 2003年 89頁）

学歴が高ければ、認知的な条件だけでなく、社会的能力あるいはモチベーションもより高いと信じてしまう。その意味では、PISAは学校の成績とコンピテンシーは別物でありうるという点を明確にしたと言える。（トラウトワイン 2008年 101頁）しかし、基幹学校生は実科学校生に比べ成績が甘くつけられる傾向がある。この傾向に州による違いはない（トラウトワイン 2008年 101頁）

いずれにせよ、魅力を失い、通学する生徒の割合も数パーセントにまで下がり、困難な条件、本来の教育からのかい離、問題の構図、そして自虐的な態度が複雑に入り組んだことにより、基幹学校はすっかり打ちのめされてしまった。バイエルン州とニーダーザクセン州では基幹学校のアピールを熱心にやっているが、それは例外的である。今後、若年人口が減少するという要因もあり、基幹学校と実科学校を統合する傾向はますます強まっていくであろう。

1.3.1 基幹学校卒業生のチャンス

基幹学校修了者にはどんなチャンスがあるのか？労働市場における統計で見てみる。

工業・技術系職業訓練

実科学校卒業生 2006年 47.0%

基幹学校卒業生 2006年 22.7%

実科学校卒業生 2005年 52.7%

基幹学校卒業生 2005年 28.9%

営業販売系職業訓練

実科学校卒業生 2006年 31.6%

基幹学校卒業生	2006年	20.1%
実科学校卒業生	2005年	38.8%
基幹学校卒業生	2005年	25.7%
分野横断的職業		
実科学校卒業生	2006年	26.8%
基幹学校卒業生	2006年	5.0%
実科学校卒業生	2005年	32.1%
基幹学校卒業生	2005年	6.9%

表 1：新規職業訓練契約の出身学校別内訳（DIHK 2007年 54頁）

上記の表から分かるように、2006年の時点で、基幹学校卒業生は工業・技術系の職種と営業販売系の職種分類のいずれでも職業訓練契約数で前年を下回っている。しかし、この減少傾向は実科学校の卒業生にも言えることである。この職業訓練契約をめぐる競争関係の背後には、大学入学資格を得たギムナジウム修了者が職業訓練の市場に進出してきているという背景がある。

同時に、実技に力を入れたコンセプトを持ち、独自の教育内容を進める基幹学校もあり、そのような学校の卒業生は職業訓練契約を結びやすい。成功の要因は、実際に雇用主を安心させることのできるような卒業生を多く送り込み、雇用主を納得させていることにある。

他方、基幹学校がみそっかすの学校とかレベルの低い学校であることによる問題も認められている。ハンブルクでは、基幹学校に通う生徒は同年齢層の11%を占めるが、職業訓練をドロップアウトする確率が高いという特徴がある。しばしば、職業の方向性がはっきりしていなかったり、自信がなかったり、責任感が弱かったりという傾向が見て取れる。親は子供の職業上の進路にまったく関心がないか、親自身が見本とならななかったり、現実とかけ離れた期待を子供にしているかである。学校と親との協力は不可欠なので、このような場合、子供の進路決定プロセスに親を巻き込むのに学校側が大きな努力をしなければならぬ。

1.3.2 基幹学校の魅力

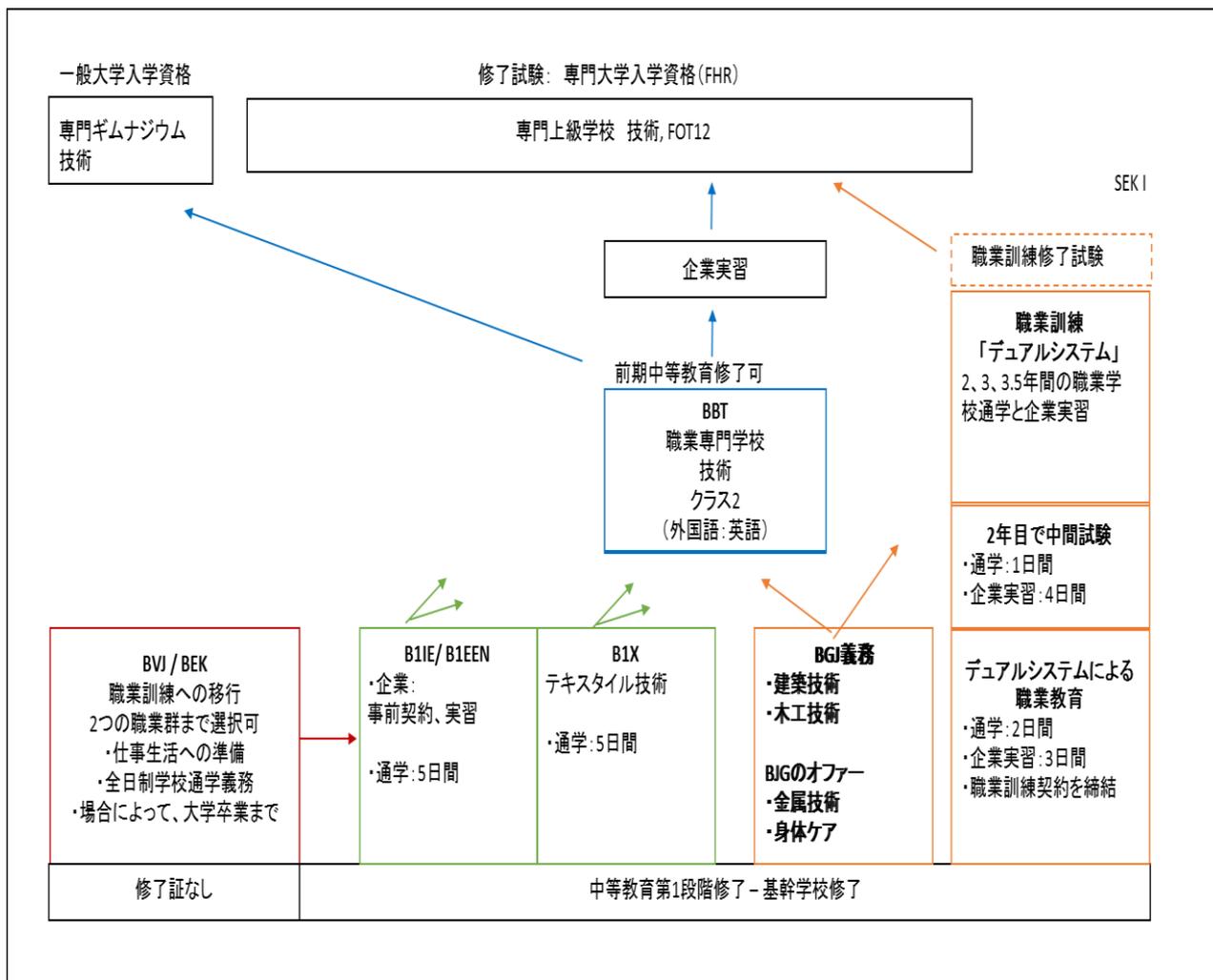
雇用主は、基幹学校生の一般的な教育のレベルの低さに加え、生きる上で必要な基本的能力、学ぼうとする姿勢、注意力、慎重さ、信頼性、忍耐力のような人格的能力の欠如に不満を漏らす。

とはいえ、2006年の時点では約100万人の生徒が基幹学校に通っており、これは同年齢層の20%を占める。基幹学校通学者の割合は州によって大きく異なる。旧東独地域の州では、基幹学校や実科学校として独立しているのではなく、1つの学校機関が複数の学校形態を擁していることが多い。メクレンブルク・フォアポメルン州のみ全生徒の基幹学校通学者の割合が1.7%と低い。2006/07年度では、ザール

ラント州で0.5%、ブレーメン州で9.4%、バーデン・ヴュルテンベルク州で26.7%、バイエルン州で33.4%と開きがある。(ドイツ連邦統計局 2007年10月9日) 過去数年の出生率と今後の予測を踏まえると、「高等教育レベルに入学する生徒の数は減っていく」(レスナー 2007年 82頁) ことが見て取れる。これにより、基幹学校への通学を登録する生徒は今後限りなくゼロに近づいていくことが予想される。

基幹学校をより魅力的にするため、いくつかの学校形態を組み合わせる試みがしばしば行われている。それにより、いくつかの州では基幹学校を修了すると中級学校卒業資格(Mittlere Reife)の資格を得ることが可能になる。現在、中級学校卒業資格を取得すると、専門大学、またはマイスターの資格を得て、その後大学教育を受けることも可能である。C. Schuchartは、より低位にあるとされる学校形態でそれより高いレベルの修了資格を得た場合、通った学校の種類は基本的にそれほど重要な意味を持たないということを調査によって証明した。それをもとに、この研究者は学校形態と修了資格の切り離しを主張している。(シュハルト、2006年) この調査でも、親の学歴が高い場合に、子供の学歴も高くなったり、高い教育レベルを目指す傾向が強くなるが見られるが、それは不思議なことではない。たとえ学校形態の間の垣根を取り払って、相互の行き交いを容易にしても、この傾向は変わらない。

原則的に、現在のニーダーザクセン州のモデルが示すように、基幹学校の修了資格でも大学への門戸は開かれている。



BVJ 職業準備年

BEK 職業スタートアップクラス

BGJ 職業基礎教育年

表 2 基幹学校卒業生の教育進路の可能性 (グロース 2008 年)

1.3.3 基幹学校生へのサポート

基幹学校生の中でも、とりわけ教育的バックグラウンドでハンディのある生徒には、職業の世界への移行期に明確な目的のあるサポートが必要であることを、レーベルガーはハンブルクの例を挙げて示している (レーベルガー 2001 年)。基幹学校生は将来どんな分野で職業訓練ができるかという問いに対し、しばしば非現実的なイメージを抱いている。妄想のような夢は、ダンサー、俳優、銀行員、IT 営業職、マネージャー、はたまた薬剤師、弁護士にまで膨らむ。一部、このような実生活とかけ離れた職業の夢を親が後押ししたり、あるいは、親自身が定職を持たないために職業人としての手本を子供に示せなかったりすることがある。

それに加え、産業界が厳しく批判しているのは、基幹学校卒業生の一般教育とモチベーションの欠如である。また、時間を守ること、努力、信頼性のような仕事上の道徳の不足も指摘されている。

そのため、ハンブルクの「ファルケンベルク学校」等では、週に1度、実技の日を設けている。9年生のクラスでは、新しい形の企業実習が取り入れられている。定期的な実技学習により、生徒はモチベーションをもって働き、自分の能力を現実的に見極めることが図られる。1週間の企業実習の後、生徒は10週間にわたり、特定の曜日に企業内の現実と向き合い、実際の仕事のプロセスを知る。この実習の後、良い印象を与えた生徒は、職業訓練生として企業に採用してもらいチャンスが得られる。重要なのは、企業実習ができるかどうかについて、生徒が直接企業に問い合わせる点である。実習期間中、生徒は、学習能力に合致した特定のテーマに取り組む。実習中、担当者は実習生を書面で評価する。このモデルは数年前に導入され、現在では複数の州でも取り入れられている。

別の試みとしては、全日制の学校で行われている例がある。早い時期から、授業外の活動として、生徒の適性や特性を職業訓練で要求されるレベルと合致させる試みが行われている。

2. 職業訓練に必要な能力

2.1 ビリーフシステムと属性

今日、教育学から明らかになっているのは、われわれの知識だけでなく行動にとっても、認知力や行動力に加え、ビリーフシステムとその属性も決定的に重要な意味を持つということだ。何が重要で現実的であるか、そしてどのような要因が何をもたらすかといった考えによって、物事に対する姿勢、主観的な理論、知的な内省、つまり判断が形付けられる。特定の社会的な状況（例えば職業訓練市場）が不透明になればなるほど、偏見、常識による思い込み、世の中の傾向、感情、関心などがその判断に入り込む。若者が職業訓練を始めるための十分な能力を有していないとか、職業訓練のために居住地を移ることに消極的であるとか、産業界の側が十分な数の職業訓練を行っていないといった問題について、それが近年、複雑化したかどうかと問われると、その答えは簡単には出せない（エバーハルト／クレヴェルト／ウルリッヒ 2006年 連邦教育研究所）。科学的な手法をもってこの問いについての回答は簡単には得られない。若者と労働組合は、問題は職業訓練の場の不足であると主張し、雇用主と経済団体は若者の能力が職業訓練を行うに足りない、または仕事のために居住地を変えることをためらう傾向があると言う。何か変化が起こった場合、一方に責任を押し付けるのではなく、「ビリーフシステム」の双方で何らかの対応がなされなければならない。

若者は自分の側にも責任があることを認め、自分の運命を自分の手で引き受けなければならない。

職業訓練を行う雇用主も、若者の能力に何を期待したいのか、そして実際に何が期待できるのか、職業訓練を通じて何を学ばせなければいけないのかといった問いに現実的に向き合わなければならない。

2.2 今日、職業訓練を始める時点で何が求められているのか？

公の場の議論では、職業への道を踏み出す若者に欠けていると言われる特徴は、モチベーション、仕事のために居住地を移してもよいという意味、実際の能力などである。しかし、メディアでのディスカッションから離れた場所では、実際に何が職業訓練生に求められているのか。2005年秋に482名の専門家から回答を得たあるアンケート調査では、以下のような結果が出た（ウルリッヒ 2006年 80頁）。信頼性、学習意欲、努力する意欲、責任感、集中力、忍耐力、基礎的な計算能力、簡単な暗算、緻密さ、配慮、礼儀正しさ、寛容性、自己批判力、問題対応能力、適応性、企業内のヒエラルヒーに順応する用意。

8割以上の回答で、このような一般的な仕事面、能力面、社会面での道徳的な要素が強調されている。学校で学ぶ知識に関しては、基本的な計算能力と簡単な暗算の能力ということで専門家は一致している。比率計算や比例計算、ドイツ語の正書法、口頭での表現力になると、すでに専門家の多くは判断しかねている。いくつかの職種では、筆記による表現力、面積、長さ、体積の計算の基礎、経営に関する基本知識、英語の基礎知識が求められる（連邦教育研究所 ボン）

知識の要素はそれほど重要視されていないにも関わらず、多くの企業は、数多くの応募者を絞り込むために学歴と学校の成績を参考にする。学校の成績の良し悪しが、職業訓練の成功に必要な不可欠とされる信頼性、学習意欲、努力する意欲、責任感、集中力、忍耐力のような専門を問わず共通する能力を測るバロメーターであると判断しているようである。これはつまり、成績の悪い生徒は上記のような能力を持っていないとほめかしているようなものである。このように選抜されると、特に（成績の悪い）基幹学校卒業生にとっては仕事を獲得の可能性が摘み取られてしまうことを意味する。この問題は、少なくとも中級教育修了資格、場合によっては専門大学入学資格を持つ応募者に対しても顕著に見られる。基幹学校生はこれにより、自分の能力を発揮できる以前の職業訓練の場を求めた段階で「うしろのランク」にいる者として切り捨てられてしまうのである。

2.3 職業訓練に必要な能力についての問題

職業訓練に必要な能力という概念は、概念としてだけでなく、演繹的にも決して確立されたものではない。学問的に裏付けられた長期持続的な定義があるわけではなく、認知的な特性や学校の成績だけがその能力に関係づけられることも多く（シュレンマー 2008 年）、この能力が学歴、認知的基礎コンピテンシー、成人になってからの就業経歴とどのような相互関係にあるのかについて研究があるわけでもない（クライナルト／マテス 2008 年）

しばしば、統計資料などから、基幹学校生は職業訓練のプロセスの中でますます敗者になっていると結論づけられることがある。小規模なスタディを見る限り、雇用主は生徒の能力におおむね満足しているものの、近年、能力の低下が見られるとも回答している（チューリンガー・スタディ 比較 ヴィンクラー 2008 年）。とりわけ国語と数学で見られる能力の低下は、特に PISA との関連で改めて集中的に行われたいくつもの演繹的な研究からも明らかにされている（トラウトワイン 特に 2008 年 96 頁）。基幹学校生の成績の低下については、しかしながら、構造的な条件も考慮されなければならない。生徒たちの能力的、社会的、文化的、学習履歴的関連が集まり、相互に入り組んだ結果がこのような傾向を生み出しているといえる。

職業訓練の応募者に公平を期するためには、個人の適性および能力に目を向けた観点も取り入れられる必要がある（シュレンマー 2008 年 23 頁）。その際、学習者本人が職業への適正、傾向、能力に加え、その後のキャリアアップのための教育の機会についても一考しておくべきである。また、ここでは、おおまかな職業適性を示す一般的な能力というよりは、特定の職業のための特別な能力があるかが問われなければならない。職業訓練を行うのに十分な能力が備わっているかどうかは、その背景や状況に応じて見極められるべきものである（シュレンマー／ヒルケ 2008 年 23 頁）。生徒と職業との間にうまく機能する適性関係があるかという点と同時に、これまでの本人の経歴や社会成熟度の特徴を含む個人的な発達のプロセスも視野に入れる必要がある。ティッペルト（2002 年）は、能力開発において学校教育と職業訓練で起こる現象の統合を試みた。そこでは、特に若者の問題解決能力の発達をどう促すかが試された。結論としてシュレンマーは、職業訓練に必要な能力というのは、学校のカリキュラムにはない、つまりカリキュラムの中でとらえることができない概念であることを確認した。

ここで特徴的なのは (K.C.)、能力形成について言う場合、常に学校、つまり主に認知的な目標がまず考えられてしまうということだ。上記で述べた専門家に対するアンケートにおいても (エーレントール / エバーハルト / ウルリッヒ 2006 年)、職業訓練を行うのに十分な能力として学校での成績以外に何かがあるのか回答者ははっきりと答えられなかった。信頼性、努力する意思、忍耐力といった一般的な能力はほぼ 8 割の回答者が挙げていた一方、筆記による表現力、幾何学の知識、英語の基礎知識などを挙げたのは 3~4 割にとどまった。専門家は、学校で学ぶ知識よりも、まず一般的な仕事面、能力面、社会面での道徳を思い浮かべる。ただし、これは職業によって大きく異なる点でもある。専門家は過去 15 年間での若者の能力の低下を指摘しているが、これは人間として生きる上で必要な基本的能力の他に集中力とも関連があると述べている。若者の忍耐力、緻密さ、礼儀正しさも低下していると言われている。その理由として、家庭環境、労働意欲、職業教育や職場についての知識の変化、価値観の不十分な育成、職業選択や職業訓練事業所探しの際の準備の不十分さ、職業訓練に求められる内容の変化、職場環境の変化が挙げられている。特に職場環境の複雑化がここ 15 年以來、大きく増しており、この傾向はますます加速している。同時に、家庭における責任感の意識や職業道徳の育成も減少している (エーレントール / エバーハルト / ウルリッヒ 2006 年 4ff 頁)。

これらの指摘は、若者にその責任があるとするのではなく、15 年前と比較して職業訓練をするにも多くの努力が必要であることを示し、どちらかという、家庭での教育の不十分さに要因があるとみられている。

雇用主は若者の成長のポテンシャルに注目し、それを伸ばす手助けをするべきである。しかし、若者も自分の人生に自分で責任を持つことを学ばなければならない。それには、自分の能力を現実的に見つめることも含まれる。今日では、職業訓練を受けるのに必要な資格があっても、職業訓練を行う職場が保証されることを意味しない。特にウルリッヒ (2007 年) は、職業訓練の求人が減る一方で、職業訓練の場を求める学卒者は増えているというはさみの両刃がますます開いていくような現象を指摘している。これを裏付けているのは、大規模な人員削減である。「2000~2005 年の間だけで、社会保険義務のある 170 万の職場が減少した。2006 年にやっと雇用は上向きになり、職業訓練の求人も約 29,000 件増加した」(ウルリッヒ 2007 年 8 頁) この前向きな傾向は現在まで続いており、職業訓練の求人も増えて当然と期待された。しかし、デュアルシステムによる職業訓練を望む若者の数は多いにもかかわらず、2004 年に職業訓練を始めることができたのは学卒者の約半数強に過ぎない。2007 年では、学卒者でデュアルシステムによる職業訓練を望む者の半数が職業訓練を始めていない。基幹学校の卒業者の場合、職業を学ぶ道に進める者の割合は平均以下だ (49.1%)。受け入れられなかった若者のほとんどは自分の職業の夢をあきらめず、13.3%は 1 年以内に別の雇用主を探し、19.7%は翌年の職業訓練開始を目指す (BMBF 2008 年)。

ここで興味深いのは、本人の見解によると、訓練先が見つからなかった若者の方がすぐに見つかった若者に比べ、ずっと熱心に職業訓練先探しを行っていることだ。彼らは自分から雇用主にコンタクトを取り、職業アドバイスを受け、親戚や知り合いや友達に助けを借り、共住地から 100 km 離れた場所にも応募している。それなのに、そのような若者が面接に呼ばれることは少ない。移民の背景を持つ若者は地域を超えて職を求める傾向が低い。職業訓練の場を得た若者のうち、75.1%がその職種が自分が希望

したものであったと答えている。

ウルリッヒの考えでは、実際には、職業訓練の場を探す若者の数は公的機関が示す統計よりずっと多いと思われる。多くの若者が過渡期のシステムに流れていくためである。特に、職業訓練準備年と連邦雇用局による職業準備対策（スタートアップのための企業による能力付与）がそれに該当する。また、職業基礎教育年と職業専門学校もそれに含まれる。あいにく、この過渡期のシステムとして機能する基礎教育課程にどれだけの若者が流入しているかを示す十分な研究結果はない。

事実なのは、職業訓練の求人求職状況はこれからも買い手市場であり続けるということだ。そして、応募者の大量の履歴書を処理するために、雇用主はこれからも学校の成績を選考基準にするであろう。基幹学校の卒業生で、数学の成績が「十分である（6段階評価の上から4番目）」程度でしかない者が成功するチャンスは、競争の激しくない地域で26%、競争が激しい地域で15%であり、いずれも低い割合である（ウルリッヒ 2007年 12頁）。雇用主にとって、学校での成績が良いということは、自己管理能力といった仕事上で重要な道徳が身についていくことを意味する。それでもいまだに、選考に通らないのは、人格的な欠陥があるか職業訓練を行うのに必要な能力が足りないからだ結論づけられる。（ウルリッヒ 2007年 12f頁）

2.4 職業訓練開始資格の判定基準

連邦雇用庁は連邦経済技術省、連邦労働社会省、連邦教育研究省、ドイツ連邦工業連盟、ドイツ経営者連盟、ドイツ手工業中央連盟、ドイツ商工会議所会議とともに職業訓練開始資格の判定基準カタログを作成した。そこで扱われている内容は職業訓練開始資格、職業適性、就職実現性の3点である。

一つ目の職業訓練開始資格は、学校教育における成績と仕事処理能力が職業訓練に最低限必要な程度にまで到達していることを証明するものである。内容としては、学校で学んだ知識や能力、肉体的そして精神的なタフさ、例えば1日8時間の労働時間に耐えられるか、あるいは日々の生活をこなす基本的な知恵が備わっているかを指す。まだ到達していないと思われる点については、今後の人格形成の過程で育成されていくことが求められる。

二つ目の職業適性は、ある職種の仕事を実行する上で求められる条件とその程度である。この適性が合致すれば、職業によって得られる満足感も大きくなる。具体的に1職種に特定して見極める場合と、職業群を対象とする場合がある。仕事に必要とされる特徴は、相応の習熟度によって特殊性が増す。

三つ目の就職実現性は、あらかじめ備わった適性によって職業訓練や仕事に就けるかどうかという制約ができるため、どちらかというとなegティブに定義される。この制約の程度は、応募者が適性を有しているかいないかによって差が出るが、同時に、労働市場の状況に左右される場合もあれば、その職業分野特有の事情によって変化することもある。

このように 3 点を個別に見ていくと明らかになるのは、すでに職業訓練に求められる能力の議論で扱った内容である。職業訓練で求められる能力は一般的なものである。例えば、学校で学んだ知識、一般的な能力、肉体的な条件、精神的な変数を含む。この能力は、その後の人生の中でさらに発達する可能性があるものの（職業訓練開始資格）、職業から切り離されているものでもなく（職業適性）、特別な条件、例えば個人的なハンディキャップや業種に特有の条件などによって制約が生じることもある（就業実現性）。例えば、職業適性が高い場合でも、職業訓練の求人が少ないといった労働市場の特性のために就職実現性が低くなる可能性があることは、カタログにおいてはあまり考慮されていない。

結局のところ、職業訓練開始資格の内容も、学校で学ぶ基礎知識や心理的な能力的特徴と同様、仕事で求められる能力と応募者の学校での成績と切り離せない。というのも、例えば「言語能力」や「作業速度」が判定される場合、それは対象となる職業でのクオリティレベルと切り離すことができない。教師の言語能力は、板金工のそれとは同じではない。そして、正書法や句読法が身に付いていることが求められるれば、該当者は皆無という結果に終わる。

2.5 職業訓練求職者の移動受容度

居住地以外の場所でも職を求めることは、職業訓練の場が少ない今日では珍しいことではない。2004年に連邦雇用庁と連邦職業教育研究所の行ったアンケート調査では、自分の故郷から 100 km以上離れた場所でも応募した人の数は 14 万 4,500 人で、全回答者の 23%であった。職業訓練の求人が少ない地域では（100 名の応募者に対し、求人が 60 以下）、44%に達する。そこでは、女子の方が職業訓練のために居住地を変えることに抵抗が少ない（女子 50%対男子 39%）。

職業訓練を行う職種を選ぶ際の融通性も重要である。手を尽くして 40 通の履歴書を送っても希望する職業訓練の場を見つけられないという若者も多いが、その場合は違う職業にも応募する。同時に、職業訓練の職場を全く探そうとしない若者もいる。それが、職業訓練の求人数と求職者数の開きを見えなくしてしまっていると 2003 年 3 月 1 日付の南ドイツ新聞は報じている。

職場で行うテスト結果などから判断して、応募者は増えているのに彼らの能力は下がっているといったネガティブな意見が出るようになってきている。深刻なのは、特に学校の成績が悪く職業訓練の場を見つけるのが難しいような若者が、ますますひっ迫している求人に何年も応募し続けていることである。それにより、成績の悪い応募者の割合が高くなり、企業側も応募者は増えているのに能力のある人材がいないと確信してしまう。最近、経済状況の改善により、職業訓練の求人状況も改善されてきているが、それでもすべての問題が解決されているとはいえない。

2.6 職業訓練応募者の能力の自己評価

PISA が行われるようになってから、ドイツの学卒者の学力がメディアの議論でテーマとして取り上げられることが多くなった。ドイツの教育制度には不備があるという。しかし、連邦雇用庁と職業教育研究

所が共同で 2004 年に行った調査結果によると、職業訓練に応募している若者自身の自己評価では、自分が職業訓練を行うのに十分な能力を備えていると回答した者の割合は 78%に達しており、教育制度に不備があるという指摘とかなりの温度差がある。なお、仕事や職業訓練に必要な能力のすべては有していないと答えた者は 10%だけだった。12%は不明、または答えたくないと回答している（比較 エバーハルト/クレヴェルト/ウルリッヒ 2006 年）。ここでおおまかに言えることは、自己評価には自分の価値を守りたいという意味も働くこと、そして若者は経験の不足から自分自身について十分な評価ができないということである。だからこそ、職業訓練を受け入れている雇用主が、以前に比べ、若者とうまくやっていくのが難しいと嘆く声は真剣に受け止める必要がある。

2.7 雇用主の観点から見た応募者の能力

職業訓練の場を求める応募者の能力について、482 名の専門家（主に職業訓練指導者や職業学校の教師であるが）は非常に低いと評価している。学校で教えられる基礎知識では不十分な内容がまだまだであると答えている。それは例えば、筆記での表現能力、ドイツの正書法の正しい使用、簡単な暗算などであるが、それに加え、集中力、基本的な数学の知識、つまり割合や比例計算、幾何学の基礎知識、忍耐力、緻密さ、礼儀正しさなどである。

専門家の見方では、近年、前向きな進展があったとされたのは知識と道徳の分野のいくつかだけである。具体的には、IT 分野、英語の知識、自信である。コミュニケーション能力とチーム能力が向上したという回答は 40%に上った。

職業訓練が行われる職場では、専門的な知識がますます要求されるようになってきている。同時に、多くの若者が家庭環境のネガティブな変化にさらされながら育っており、職業訓練を前にした若者の能力がどれだけ職業訓練に耐えうるものであるかという暗澹たる状況であると言わざるを得ない。

さらに、多くの若者にとって職業の世界に入る時期がますます遅くなっており、デュアルシステムによる職業訓練を行っている者の平均年齢は今では 19 歳を超えている。

2.8 現在の職業訓練市場の状況

選ぶ側としての雇用主の立場と基幹学校の地位の低下についてはこれまでに述べたが、それに加え、1992 年以降、学卒者の増加、経済界での人材需要の低下、必要な人数の職業訓練生しか育てないという傾向により、職業訓練の求人数がひっ迫している。このような背景を踏まえると、58 人の求人に対し 100 名の応募者がいる中で、基幹学校の卒業生にどれだけのチャンスがあるのか、そして「路頭に迷わない」ためにどれだけの人数の若者が職業訓練準備措置に取りあえず居場所を見つけているか想像に難くない。そして、1992 年以降、教育予算が引き上げられ、職業訓練に対する国の支援は拡充されてきているものの、それは職業の基礎教育課程に傾斜しており、増え続ける学卒者に対し適切な職業訓練の場を提供するには至っていない。成績の悪い生徒たちは、自信をなくし、自己を効果的にアピールする場を持っていない。この点にこそ、より一層の対策を講じ、基幹学校生の地位と職業訓練を受けるための能力

を高める努力が必要だ。

具体的には、州の学校政策や社会政策により多くの費用を投資する必要がある。同時に、職業訓練を始めるに足る能力を十分に有しない生徒に対しては、まずは何をしなければならないかという点からコンセプトを作る必要がある。

2.9 特別な支援措置の教育コンセプトのための結論

考慮すべきなのは、支援システムによる自己診断と個別のサポート計画である。特に、反芻と応用が緊密につながりを持たなければならない。職業に関連する仕事をするにより、さらなるモチベーションの向上が期待できる。なぜなら、多くの基幹学校生にとって、実際に行動することが、唯一成功をもたらす戦略になるからだ。若い人たちのやる気を起こさせるには、今やっていることが、彼らのその後の人生に重要な意味を持つことを明らかにするしかない。中規模の企業との協力で成功した例では、自己認識力、職業の方向性、職業訓練の場を見つけるチャンスが高まっている。基幹学校生は努力が実を結び、それが形となって、自分の誇りにもなることを体験しなければならない。

- ・このオファーは供給システムに転じるものである（「スーパースター」と生活保護の間にある自分像）。
- ・このコンセプトでは理想的には以下の要素を取り入れる
 - ・人格形成（例えば、自己有効性の認識力を育成）
 - ・総合的な肉体認識（スポーツ、遊び、ダンス、自己防衛、化粧、ボディケア、衛生）
 - ・レトリック、コミュニケーション、自己表現（自己プレゼンテーション、コミュニケーション、言語を介さないコミュニケーション、礼儀正しさ、親切さ、態度）
 - ・知識の伝達（数学の基礎、ドイツ語、英語）
 - ・個人的なモチベーションの向上（個人相談：「自分の次の目標は？」）
 - ・ハンディキャップを乗り越えるサポート（読字障害、計算障害、注意力、ADHS）
 - ・訓練指導者や卒業生との意見交換
- ・常に現実的な視点を忘れないようにする

方法

- ・さまざまなテーマに関するプロジェクト（総合的に）
- ・知的な課題や問題の解決
- ・能力を高めることを重視した学習と知識習得の促進
- ・グループ作業および演出（劇、プレゼンテーション、一緒に行うエクササイズ）
- ・基本的能力とパターンを作り上げるための行動トレーニングとアセスメント
- ・おばあちゃんの授業時間「努力なければ成果なし」
- ・仕事上の規則との折り合いを遊びを交えて学ぶ

- ・学習セラピーを行い、学習ハンディキャップを目的に沿ってサポートする
- ・特定のモチベーションエレメントの構築

まとめ：努力、遊び、会話、教育、トレーニングの要素を取り混ぜる

目的：自分への自信と現実認識力を高める

B 実践の実現化

1 予備考

深刻な問題を持つ生徒は実社会で働くという事を、初期の段階で考えさせて目標を見つけるべきである。リューネブルグのロイファン大学では生徒達の実習で、資格を得られる事の重要性を、殆どの参加者にその意義を確かに教えて実際に興味を持たせている。特に基幹学校の問題を持つ生徒達は、将来失業者になる可能性が特にあるので、資格を得る能力を身につける事が必要不可欠である。一般概念で、基幹学校の生徒達は、実務学校と比べられて教育制度の中で成績が良くないと、評価が低い実情がある。私達の教育開発プログラムでは、他の実務学校、あるいはギムナジの生徒と同じレベルで比較できる能力までに到達できることを目指している。

基幹学校の生徒達と、教師側では基本的な思考面での隔たりがみられる。

基幹学校の生徒達

洞察力が少ない、将来に対して楽観的である、

職業訓練生として働ける場所を見つけること、あるいは仕事を見つけることに期待していない。動機やエネルギーの使い道が度々暴力とか犯罪に近いような望まれない出来事に向けられている。

教師達や主催者や教育者側が期待していること

学習意欲を出させ、信頼関係を結び、その為にモチベーションを刺激させ、

責任感が持てるようにさせる、集中力を出させる、継続持続力を持たせる、

基本的な算数の計算や、暗算を練習、注意深くなること、相手の立場も尊重することを期待する

③生徒と教育者側の異なる期待 (ウルリッヒ 2006年発表)

これは2005年に482人生徒と教師とに専門家がアンケート調査をしたデータである。

ドイツの基幹学校の状況問題は減らすことが出来ると考えられる。基幹学校の生徒を強く人間開発させる決定的な事は、知識を増やすという事ではなく、他の教育学教授法であり、若者の世界観なり価値感とそして社会環境や周囲を変えさせるという事である。

- 若者達は自己責任で自分の人生を切り開いていくことを学ばなくてはならない。
- 受け入れ側も、応募者の資質や条件で何を期待できるか、そしてこの教育法で最初に何を達成できるか現実味を考慮して見なくてならない。

この教授方法での大切な基幹学校の生徒の為の基盤は、サマーアカデミーのイベントであるという事になる。2007年の8月に最初のパイロットサマーアカデミーが開催された。

参加した各専門の科学者達は、参加した生徒達が4週間の間で持続可能な変化を起こすことが出来るという確信を持てた。と同時に、開催されたサマーアカデミーは長期間に渡る開発コンテキストの一部であるという確信ももてた。

2 コンセプト

1. 基礎知識の向上

認知的教育の目的
読む
書く
計算する
英語

2. 自己評価の変化

情緒的学習目標
自己知覚認識
体の知覚
自己批判
情緒の安定
両義性と寛容
目標を定める

3. 自己表現力の向上

坑道の目標
安定性
自己コントロール
親切好意的
丁寧さ
修辞法
非言語的な表現

上記の3つの柱が相互補強をする。

目標に到達するためには異なる手法を使うが、例えばプロジェクト作業、自習、コーチング、グループ作業と演出監督、社会学習、コンテスト、リスク負担、役を演ずる、アセスメント、プレゼンテーション、カスティング、お婆ちゃんの教室；(緊張、遊び、娯楽、啓発、そしてトレーニングのミックス。)

④サマーアカデミーの目標

サマーアカデミーは大きなコンセプトの一部である。集中的な前後の世話を含めて全てで1年半の期間がかかる。サマーアカデミーは、テーマ毎に4期に分けて構成されている。

- 1 週間目 個々のプロジェクトを知り、申し込みをする
2, 3 週間目 個々のプロジェクト毎のグループ ” 島 ” 活動実試、ボクシング、サッカー、ワンゲル、音楽、使途の会社経営、生徒議会
4 週間目 共同で終了する

⑤時間割

最初は、お互い自己紹介して挨拶して知り合う。

- 1 日目 出会い、部屋の手配、食事、小グループに分かれて出会いの遊び 。
 コンセプトの説明 (繰り返し)、目的、コース、トレーニングの内容と目標、プロジェクトの説明紹介。 ; 実験
2 日目 プロジェクトの目的の説明、グループメンバーと知り合う、グループサポート・システムとブレイン・トーミングのプレゼンテーション。
3 日目 誤り作りプロジェクト、役割を果たすことと期待、グループの中での異なり、計画とコンセプト作り、学習目的、クラッシュコースと訓練の単位。

2-1 初日の例

モジュール： 誤り作りプロジェクト

実験の分野： 都合の悪いネガティブな事を認識する

- ネガティブな事を知るという事は免責事項を知るという事になり、自分で経験したり 自分で誤りを犯したことから学びとるということである。
- 追行されたプロジェクトでは、参加者は異なる目的で確かめて、自分で間違えたところをみれば、どの分野に適していないかが分かる。
- 間違え試みを一番多く完了し、そこで何を学んだかを明らかに提示できた者には最後にシンボリックな賞がもらえる。
- このプロジェクトの目的は、他者に気に入られるとか、そうしなければならない、と言うのではなく根本的に異なる方法で間違いを手にして努力を削るということである。

専門	提供
数学	遊びながら
ドイツ語	とにかく読む
英語	add one out
リズム & ダンス	体を動かす
声楽	歌う
楽器	演奏
コーチング	私ー君 ー私達
コンピューター	pp&doc
木工	バーベキュー用の火バサミを持ち帰る
スポーツ	ボクシング & フィットネス

⑥ 誤りの試みの日 の オフター

2-2 予定されている課題

サマーアカデミーの主体となるのは参加者は複数の課題に参加する。

生徒の会社か 音楽か、どちらかを参加者は選択する。

生徒議会、 議会のメンバーは生徒達が選ぶ

生徒が手工業者に会う ー 全員の生徒が参加する

⑦プロジェクト オフター

最初のプロジェクトは、生徒の会社の準備である。

経過 例 木工

- 1、コンセプトを提案 ； 製品を考える
- 2、立場、役割、財政を決める
- 3、品質開発にかんして記述 （柔らかさと堅さ）
- 4、人材の新採用 ；
 - 募集 ； プロフィール
 - 願書 ； モデル
 - 選択 ； 役割の手順

⑧ 生徒の会社 木

2つめのプロジェクトは、生徒達はミュージカルの催し物を計画して実行する

- 1 各チームの準備。チームの専門性と能力を調べる。
- 2 トレーニングは専門家が最適化を計る
- 3 競争してのコンテストが各グループにやる気を出させる
- 4 実行 ； 計画、準備、置き換え、過程に付き添う
- 5 個々のチーム ； バンド、コーラス、ソリスト、俳優グループ、ダンスグループ、準備グループ、テクニク実行部
- 6 ミュージカルの上演 “ 諦めない”

⑨ ミュージカル準備の過程

3つ目のプロジェクトは生徒議会である。9人の生徒が生徒議会に1週間参与した。生徒議会では会長と副会長を選ぶ。アカデミーでの日程に関して大切な事を1人の生徒が質問し、そこで論議してキャンプ生活での共同生活でのルールを決める。もし、問題が他の人に影響を与えるようなケースでは、この問題に関して個人面接をしてヒアリングする。生徒議会でプロジェクト進行に関して決められたことは、全員の生徒をまとめる役割をもつ。

4つ目のプロジェクトで生徒達はゴスラーの職業開発工房で木工、メタル、電気に関して熱心に従事し、親方美容師の方にもキャンプに来てもらった。

- 1、親方教師との接触を用意した。
- 2、ゴスラーの職業開発工房と親方美容師を訪問する手配をした。
- 3、生徒達は異なる手工業の職業を知り、試してみることが出来る。
- 4、生徒達は自分達のチャンスを知り、しかしどこで何が不足しているか、弱いかを正確に知り、更に成長できるように励ます。

⑩ 職業開発工房訪問へのオファー

2-3 クラッシュコース

プロジェクトの実習と平行して、参加者はクラッシュコースを取り、個々のコーチングを受ける。

読解力に関しては、補助のオファーを出している。青少年の本（著者アベディ イソラ）がヴェルツブルグのアレナー出版社から全員の生徒に無料で提供してくれた。生徒は各自決められた章までは読むことができる、あるいは誰かが読んで聞くこともできる。そして、その後、実際に著者が訪問して最後のところまで読み、追憶の場面でブラジルの音楽が出てくるが、その箇所で著者の夫が実際にブラジルの楽器で音楽を演奏してくれる。（ロマンはブラジルで演じる）

クラッシュコース

読む 決められたプロジェクト文学
書く テキストを構想する
計算する プロジェクトの課題で
計画する プロジェクトの課題で
これ上記が 1の柱、下記2つが2と3の柱である

コーチング / トレーニング

問題のある個人コーチング
グループの中で自己評価
グループの中で自己有効性
グループの中でアクターと共に 登場
動機をサポートする
独自の動機を持つためのコース
特別な動機のためのヘルプ
傑出している 体験

⑪ 有資格プロフィール

クラッシュコースは、内容的にプロジェクトとの結びつきが部分的にあり、特別な専門知識を必要とする。

目標 : 基礎知識の拡大、作文の間違いを添削する、専門的な手法をオファーする

条件 : プロジェクトの目的と連結していること

要求事項 : 生徒の弱点 文法に弱い、文字の大小のルールが不明、注意散漫 を助ける

読む : 初期診断を作製、状況に合わせての能力開発計画を作製、
自己援助の力で切る援助を計画

書く : 原因診断、文章を最後まで書く、目的到達を対処できる開発プログラム

計算 : 現状の力を理解する、状況に応じた開発プログラムを作製、
手法の専門家による学習、将来提案されて学習法、学校の要望
メタ認知

計画 : 基礎のトレーニング、方針を立てる、課題の構想

⑫ クラッシュコース

サマーアカデミーを補佐し、認知的能力を造形する長期的なオファー（アフターケア）

オファー と 読解力と動機を上げる要求

共同パートナー： EU プロジェクト ADORE リスクを持つ青少年の読書開発

オファー 書く、計算する、英語と集中力の向上開発

共同パートナー： 向上教育の分野 集成学習療法

オファー： E-学習

共同パートナー： ベルテルスマン社のプロジェクト AINO 共同作業

時間と期間

サマーアカデミーと平行にし予定されているクラッシュコース(少なくとも 20 時間参加する)を、2007 / 2008 年のリュネンブルグのコンタクトしている基幹学校が目標とする成果にあわせて行う。

⑬ 共同パートナーとのネット化

2. 4 サマーアカデミーの終了時には、成果のプレゼンテーションと共同終了がある。

プロジェクトの成果のプレゼンテーション

- 生徒の会社 完成した製品の展示会
- 生徒会議 共同生活の成果とその報告書
- 証明書がでた手工業親方訪問の成果
- ミュージカル 演出 と行事管理

サマーアカデミーに参加した成果は、科学的に計測されている。

(成果は最後に要約した外部からの評価を、Cの章で見ることができる。)

リュネンブルグの基幹学校との共同作業で、転移効果も把握でき持続可能な形成のプロジェクトを作り出すことができた。

サマーアカデミーは基幹学校の生徒の将来における包括的なサポート体制の一部であると捉えることができる。

2007 年

パイロット： 1 サマーアカデミー

2008-2009 年

2008 年： 1-2 他でのサマーアカデミー、 2009： ロールアウト

サマーアカデミーのアフターケアとしてもメンターリングプログラム

リューネブルグ大学の学生達がスポンサーシップを受け持つ

基幹学校の生徒達への援助の構想と向上教育

ドイツの教育制度の中で、基幹学校の役割に関して大学や一般メディアでの公開討論を行った。

(カンファレンス、討論、出版物)

⑭ 展望

2007年のパイロットアカデミーを実行するにあたり、段階的名プロジェクトマネジメントが必要だった。

プロセス

内容

1、予備交渉

(16, 03, 2007 電話連絡カンファレンス)

2、コンセプトの開発

教授法と組織のスケッチ、 組織チームの統合

3、コンセプトの詳細

教授法の更なる検討

アカデミーの場所と教師陣や世話人の獲得

(5, 2005 コンセプト全ての討論と実行を決定)

4、組織の前準備

個々のアカデミーの準備 参加者の募集選択

(6.2007 財政面の準備と説明と準備を完了させた。)

5、パイロットサマーアカデミー

(3. ~29.2007 パイロットサマーアカデミー、 評価され来年度も継続)

6、2008 ロールアウト 準備

⑮ 経過と推移

2. 5 参加者

パイロットアカデミーは、ニーダーザクセンの生徒 58 人が参加して行われた。

参加者

- リューネブルグとその近郊からの基幹学校の 8 年生
- 多人数の生徒は異なるプログラムの枠を持たせるために必要である
- 1つのグループの大きさは、課題と方法論により異なる
- どの参加者も選択プロジェクトから一つ選び、トレーニングやクラッシュコースに参加し、美容師、電気工、木工、メタルの職業領域を経験する。
- 自己紹介の期日を通して、生徒達にプロジェクトを案内し、各自どれを選択するか申し出る

世話人

- 統合指導者 2人 (同時にプロジェクト担当)
- プロジェクト指導者 3人 (教師、手工業の親方、ミュージカルコンポニスト
振り付け師)
- 学習アシスタント3人 クラッシュコース用 (教師、学習治療師)
- トレーナー2人 (治療師、俳優)
- 10人の大学生、異なる分野で分けて、世話をさせる
- プロジェクトの内容により 更にスタッフが必要、例えば手工業の親方、
スポーツトレーナー

教育世話人の担当分け

組織

2人の総合指導者 (実際の監督—と全体のプロジェクトの監督業実—交代して行う)

生徒の会社の計画

- 高い専門性を持つ教師 (家具職人)、生徒の会社の経験がある人
- 技術製作などの専門分野で学んでいる大学生

生徒議会の計画

- 適切な教育の下地がある大学生を2人指導者とする

ミュージカルの催し物の計画

- ミュージカルの為の作曲家、振り付け師
- スポーツ、音楽、サーカス、演劇、芸術、の分野に関して適切な教
良くの下地がある大学生、あるいは適切な経験がある実習生か生徒
- 俳優、振り付け師

手工業の親方に会う計画

- ゴスラーの職業開発工房の手工業の親方に会う
- 美容師の親方に会う

クラッシュコース、トレーニングの単位

- 熟練した学習セラピストの監督下で教育をうけている学習セラピス
ト
- 熟練したセラピストの監督下で教育学を学んでいる大学生
- 基幹学校生徒の就職応募面接の長年の経験があり、経済心理学を大
学で学んだ人